

優遇措置と業者間提携，資本に物を言わせてのチップ工場系列化が支えになっている。他と競合しない用水権，港の存在も有利と言える。しかし，紙・パルプ工業が地域から受ける好条件に比して，地域にはそれほど働く場所が増えるわけではなく，最大の公害発生源ですらある。見合うメリットがあるとは言えない。食い荒らされているとも言える。釧路においては産業によって，地域的条件の生かし方，克服の仕方，地域との結びつきが異なっている。特に近代工業としての紙・パルプ工業と他産業の落差が大きい。これには産業の発段階が大きな要因であると考えられる。

## 秩父市の産業構造とその変化

西 谷 陽 子

本論文は，埼玉県秩父市が，織物業という在来工業を持つ都市であることに注目し，在来工業織物業が，現在どのような状態にあるかを調べると共に，首都圏にあって，在来工業をもつ都市の実態を探ることを目的として，その際，特に最近における変化に重点を置いた。

秩父市は，東京から約70kmの埼玉県西部山中の盆地を中心に位置する人口約6万人の都市である。この市の産業については以下のようなものである。

第2次産業就業者数は，全就業者の45%を占めて多いが（全国は34%，昭和45年）36%は製造業によるものであり，製造業都市といえることができる。

第1次産業就業者は，13.4%を占め，全国より6%少く，減少も全国よりも急激である。第2種兼業農家割合も全国の値より大きく，秩父農業は，日本農業が一般的におかれているより，さらに厳しい情勢におかれているといえる。耕地面積が1戸当平均0.55haにすぎず，山地斜面の瘦地が広いこと，収入は一般に低い。今後も，専業→兼業→脱農業への動きは進むものと思われる。また，他産業に比べ，老年労働者が多いことが特色である。

昭和45年現在，43%を占め，構成比において，第1次産業の減少分だけ増加しているのが，第3次産業である。建設・運輸・不動産業などの，特に昭和40年以後の増加が目立つが，これは，西武鉄道の進出によるところが大きい。

さて，次にこの市を特徴づけている製造業の内容について述べる。秩父織物業は，江戸時代に農家副業から発達した在来工業である。長い間，この地方の中心産業の1つとして歩んできたが，昭

和30年代以降、需要構造の変化を始めとし、過剰生産による過当競争の激化、労働力不足と、それに伴う賃金の高騰などの中で、今までの状態のまま存続していくことは、困難になっている。それは、構造改善事業とあいまって、工場数、及び従業者数の急減となってあらわれ、残った企業も設備近代化・新製品の開拓などで対応している。また、従業者の高令化が著しく、若年労働力不足は深刻な問題となっているが、労働条件をはじめ、職業としての魅力を考えると解決は難しいものと思われる。

また、大正末期に近代工業をこの市にもたらしたセメント工業は、主に秩父セメント(株)1社によるものであり、近代的装置産業なので労働力吸収には限度があるが、市税の約30%を占める税金を納入し、重要な産業となっている。しかし、そのために自然破壊や降灰公害に対し、市では強い態度をとれない、という問題を生んでいる。

織物業と対照的に、昭和40年以降、工場数及び従業者数の増加をみているのが、電気機械器具、精密機械器具製造業などの労働集約型の近代工業の冷細な下請工場群である。織物業からの転業も多い。

以上のような産業状態にある秩父市は、この地方では中心的な役割をもっているが、人口総数は停滞ないしは漸増気味であり、若い層も少ない。

秩父市に職場があるにもかかわらず若い人々が流出し、これは大きな問題になっている。昭和47年の新卒者のうち、秩父管内に就職した者は、就職者のうち中卒では $\frac{1}{2}$ 、高卒では $\frac{1}{3}$ にすぎない。この理由としては職種が限られていること、賃金が一般的に低いことなど職業価の問題と医療文化施設の不備などの生活環境面の問題が考えられる。秩父市がこのような状態であるのに対し、若者にとって魅力のある大都市東京がすぐ近くにあるということが流出を促していると思える。市でも、工場誘致に努めているが、公害を出さずかつ魅力ある工場を誘致するのは、なかなか難しいようである。平坦地に乏しいうえ、西武の進出により地価も上昇しており、交通条件も考えると進出しづらいものと思える。つまり、大規模な都市化、工業化がおこるには東京から離れすぎているし、若者が留っているには、東京が近くにある、と考えられるのではないか。

以上述べてきた種々の傾向は今後も続くものと思われる。